

Ⅱ－３ 森岡清美の調査資料からみる社会調査法の 彫琢と社会調査教育

——「業績にならなかった」調査資料群から——

徳安 慧一

1 はじめに

本論は、家族・イエ制度研究および宗教研究において重要な業績を多数残した社会学者 森岡清美が現在にいたるまで保管してきた調査資料のうち、特に彼自身の研究業績（書籍、学術論文、同人・紀要、調査報告、会報誌など）としてまとめられることのなかった調査資料群から、社会調査をめぐる一連の過程における調査資料とその成果としての社会調査方法の彫琢や教育との関係について検討するものである。これまで、森岡は数多くの著作を残し（森岡 [2003] 2016）、2016年には『真宗大谷派の革新運動：白川党・井上豊忠のライフヒストリー』を上梓するなど、現在に至るまで精力的に研究成果を出し続けている。しかし、森岡の調査資料をアーカイブ化に向けてデジタル化し、森岡自身による資料解説を聞く中で、相当数の調査資料が著作などの成果として公にされることなく保管されていることがわかってきた。家族・イエ制度や宗教への関心による様々なねらいのもと、相当程度の時間や労力をかけて行われた調査から生まれた数多くのデータのうち、なぜこれらの資料群は学術書や論文、報告書などの研究業績として公表され世に出ることがなかったのだろうか。

本論では、森岡が研究業績化しなかった調査資料群のリストアップをおこなった上で、それらの資料が生み出された調査の経緯や内実、また調査資料を成果物にまとめるに至らなかった理由を、調査資料に関する森岡自身による解説をふまえて検討する。本論では特に、森岡の社会調査が手法として研鑽を積み重ねる過程や学生らに向けて教育・指導した成果として、そして、成果となるか否かという二分法を超えた意義をもちうるものとして、社会調査資料群を捉えかえすことを試みる。こうした考察をふまえ、森岡の調査資料群を保管する意義と社会調査資料のアーカイブ化にあたっての課題についても概観・検討する。

2 「業績とならなかった」調査資料群はどのようなものか

2.1 「業績とならなかった」調査資料群の概況

森岡より借り受けた資料群のリスト⁽¹⁾から、森岡自身によりおこなわれた3回分の資料解説⁽²⁾および著作目録などを参照した上で確認した結果、以下の資料が森岡自身の成果として公表されていないことが明らかとなった。ただし、後述のように調査資料の一部が森岡自身や他の研究者によって成果として公刊されたものも含まれている。また、資料名については森岡自身が整理のために付していた名前をもとに、資料群としてのまとめ方や調査地を明確化する目的から、デジ

タル化した資料群の内容を確認しつつ筆者が一部改名している。

表1 「業績とならなかった」森岡清美の調査資料群一覧

記号	資料名	年代	概要
A	下阿波・阿波村七区関連資料	不明	卒論以降のもの。
B	今村家文書	不明	三重県師範学校の恩師からもらった。主に明治時代の文書。
C	岡田謙教授資料	不明	学位論文『未開社会に於ける家族』の資料。奥様から預かった。
D	伊賀における村長その他村役調査	1948	歴代村長および村役の名簿と無足人の一覧を照らし合わせた。
E	伊賀古文書 附藤堂	1948?	伊賀市郷土史研究会の会長だった沖森直三郎という古本屋からもらう。
F	カブ研究その他、卒論雑考	1948?	当時集めた資料。
G	三重県真宗史資料 仏教史資料	1949	東京文理科大学研究科第一期特別研究生時代。複数回調査。
H	伊達教会調査	1950	同時期に行われた島村教会調査は「日本農村における基督教の受容」へ。以降のキリスト教会調査との連続性。(酒枝義旗)
I	長野県小県郡神川村国分調査	1951	東京教育大学第一回社会調査実習。
J	友人関係調査	1951	東洋英和女学院専攻科非常勤講師時代。
K	石川県浅川村二俣	1951	石川県河北郡浅川村二俣・本泉寺調査。(桜井徳太郎)
L	長野県小県郡滋野村中屋敷調査	1952	東京教育大学第二回社会調査実習。
M	『中学生の作文』	1953、1956	それぞれ1953年津金村調査、1953年能登調査、1956年安中調査時に作成。
N	岡山県新池 年賀状調査	1954?	年賀状調査は別府春海による調査資料をコピーしたもの。新池調査そのものはアジア財団からの委嘱で、森岡自身は事務局を担当。
O	山梨県大鎌田村	1954	山梨県中巨摩郡大鎌田・二川組合村での農村SSM本調査。社会調査実習も兼ねた。
P	山梨県大鎌田村・二ツ村 甲西町 和泉・南湖 秋山村神野	1954、1959、1962	社会調査実習。(山梨県大鎌田村・二ツ村については農村SSM、和泉・南湖、秋山村神野は調査実習報告書あり)
Q	岐阜県白川村平瀬	1955	毛坊主については論文あり。白川村の大家族制はまとめず。(新保満)
R	能登半島農村教会調査・輪島教会関係	1955	町野町の正願寺を訪ねた。輪島調査は新保の単独調査。(新保満)
S	石川県深見調査・千葉県富里村調査	1956、1963	東京教育大学調査実習。有賀喜左衛門が中心だった。
T	福井県石徹白資料	1961	郷土史家 加藤からもらった。
U	郡上八幡安養寺文書	1962?	真宗史研究会の科学研究費による共同研究。(笠原一男)
V	立正佼正会 和田勝年君 資料	1963	当時ICUの学生だった和田勝年による調査資料。
W	三鷹市民の余暇生活調査	1965	ICU社会科学研究所での三鷹市野崎調査の一環。
X	児童養育費調査 川崎ドロップ分 17票	1965	情報不足で途中放棄した調査票。
Y	勝沼	1966	東教大社会調査実習をかね、山梨県勝沼町にて2世代比較調査。1960年の国際家族研究セミナーにおけるアメリカの三世帯調査をふまえた。その後、1972、79、81、92年に反復調査がなされた。
Z	勝沼年賀状調査	1966	1966年勝沼調査時、石原邦雄によっておこなわれた。
AA	井上愛子都心教会調査	1968	当時ICUの学生だった井上愛子による調査資料。
AB	東京都北区桐ヶ丘都営住宅調査資料	1970	東教大社会調査実習をかね、ケースウェスタン大学 M.B. サスマンと国際比較調査。(花島政三郎、石原邦雄、目黒依子、井上愛子)
AC	妙智会本部での調査	1972、1973	「宗教と社会変動」に関する日米共同研究、東教大社会調査実習。

※年代は調査実施時。概要文末（）内は調査同行者。

この調査資料群は主に1940年代後半から1970年代前半まで、森岡が東京文理科大学で卒業論文を執筆していた頃から東京教育大学の閉学が決まる前後までの期間に生成されたものである。こ

うした資料群の生成時期は森岡の研究キャリアの最初期から、彼自身の言葉を借りるならば「宗教社会学と家族社会学をともに専門領域、いわば本業とするという形、二兎を追う形が出現」（森岡 2006:122）していく時期までと重なり合っている。また調査内容も、農村調査から真宗研究・家族研究、そして歴史史料と、森岡の専門とされる研究分野全体をカバーしている。

では、上記それぞれの資料群は具体的にどのような文脈から生成されてきたのだろうか。以下では各調査資料群の詳細とこれらが生成された経緯、そしてなぜ業績にならなかったのかについて検討することとしたい。

2.2 「業績とならなかった」調査資料群の詳細について

a. キャリア初期の調査資料群

はじめに、1952年に東京文理科大学・東京教育大学で講師としてアカデミック・ポストを得る前までの、森岡の研究キャリア初期にあたる調査資料群について検討することとしたい。「下阿波・阿波村七区関連資料」（A）は、東京文理科大学での卒論以降に収集された資料群であり、耕地地名簿帳や決議録などの各種帳簿、耕地台帳などが含まれている。これらは収集はされたものの分析には使われなかったという。同じく伊賀にかかわる「伊賀における村長その他村役調査」（D）では、村役場から取り寄せた歴代の村長・助役・収入役の名簿と伊賀の無足人の帳簿⁽³⁾を突き合わせることで、村長ならびに村役になる人物と無足人であるかどうかの関係について一般的傾向を検討しようと試みたものである。「カブ研究その他、卒論雑考」（F）は卒論執筆時の資料をそのまま保管していただけだと森岡は語っている⁽⁴⁾。この点から、（F）は正確に言えば学位論文およびその後の公刊論文第一号（森岡 1948）へと結実しているが、森岡自身はこの卒論を「鈴木栄太郎先生の農村分析手法に倣って資料を整理したものすぎず、第一部を除いて論文の名に値するものではなかった」「（卒論をもとにした公刊論文の）内容に満足できず、言及あるいは引用したことは一度もない」（森岡 [2003] 2016:15）と評している。

「三重県真宗史資料 仏教史資料」（G）は、東京文理科大学および国際基督教大学研究所でのいわゆる大学院生時代にあたる1949年の資料群であり、寺院による発行物や森岡の手による寺院名簿が記されたノートなどが保管されている。対象としては真宗本願寺派のほかに、真宗高田派や天台真盛宗が取り上げられている。特に真宗高田派に関しては、東京文理科大学特別研究生第一期修了論文へと結実しているものの、出版物としては発表されていない⁽⁵⁾。福島県の「伊達教会調査」（H）は、「日本農村における基督教の受容」（1953）としてまとめられた、群馬県の島村教会調査と同時期に調査が行われた。もともと、東京大学の特別研究生と共に島村教会へ行くことになっていた島村教会に加え、もう一カ所ほど調査して欲しいと、日本基督教団の農村教会の幼児教育に関わる委員会から頼まれたという。そこで早稲田大学教授であった酒枝義旗の紹介を受けて選定された調査先が伊達教会だったが、遠かったこともあり複数回の訪問ができず、成果としてまとめることはできなかった⁽⁶⁾。最後に「友人関係調査」（J）は、東洋英和女学院大学短期大学部の専攻科で非常勤として教鞭を執っていた際、学生を対象におこなった調査の調査票などである。

b. 社会調査実習・研究プロジェクトによる調査資料群

次に、社会調査実習や研究プロジェクトを兼ねた形で生まれた調査資料群について検討する。「東京都北区桐ヶ丘都営住宅調査資料」(AB)は、オハイオ州クリーブランドのケース・ウェスタン・リザーブ大学のM.B.サスマンとの国際比較調査として、1970年7月22～28日に東京教育大学の社会調査実習を兼ねて実施された。この資料群については、当時調査に同行した目黒依子(旧姓：野尻)がサスマンのもとへ留学するにあたって森岡から貸し出された。そして、その研究成果は彼女の学位論文(Nojiri 1974)をはじめとした諸著作に結実している。そのため、集計カードや整理カードといった資料群はあるものの、調査票については目黒がアメリカへ持って行って以降の状況がわかっていない。

「勝沼」(Y)は5回のリスタディがおこなわれたいわゆる勝沼調査のうち、初回にあたる1966年の資料群である。この調査のきっかけは1960年の国際家族研究セミナーであり、そこで見たミネソタ大学のルーベン・ヒルによるアメリカの三世代調査を踏まえて実施されたものである。二世代夫婦同居に関する家族調査の成果は「二世代比較法による社会変動の研究」(森岡編 1967)としてまとめられている。また、森岡の門下生として本調査にも関わり続けた家族社会学者 堤マサエの博士論文(堤 2009)のベースにもなっている。資料としては、まとめや調査票見本、国勢調査、山梨県の統計調査や拒否票などが含まれている。統計データの「本格的な数量的分析」をおこなって成果にまとめる時間や余力がなかったがゆえに、森岡自身は調査全体のまとめをおこなっていない。もし本調査のような大規模で長期的な調査について「ほんとの実証的なまともな」成果化をしていたならば「もっと家族社会学できちっとやったとおもう」と森岡は語っている⁽⁷⁾。また、本調査の中には森岡が単独でおこなった児童調査の調査票も含まれているが、この調査もまた成果化されてはいない。

「山梨県大鎌田村 面接記録」(O)が生成されたのは、1953年に和歌山県那賀郡上岩出村にて予備調査が、1954年に福岡県糸島郡元岡村にて本調査がおこなわれた、日本社会学会の共同調査「日本農村における Social Stratification and Mobility 調査」(以下、農村SSM)の一環である。農村SSMにおいて森岡は事務局を務めており、山梨県巨摩郡大鎌田・二川組合村でおこなわれた本調査では、当時山梨大学教育学部にいた歴史学者・民俗学者の服部治則に調査地選定の協力を仰いだ。しかし1960年ミシガン大学のR.K.ビアズレーより「日本社会の近代化」研究のため招聘を受けた都合上、旧制の学位審査の兼ね合いもあって博士論文の執筆に専念しなければならなかった。このため、最も重要な資料は服部に渡し、森岡の手元に残った重複分がこの資料群である。「山梨県大鎌田村・二ツ村 甲西町和泉・南湖 秋山村神野」(P)のうち、山梨県大鎌田村・二ツ村の資料群は(O)と同じく農村SSMによるものである。甲西町和泉・南湖の資料群は1962年の東京教育大学とICU連合での、秋山村神野の資料群は1959年の東京教育大学の社会調査実習による資料である。

もともと東京教育大学の社会調査実習は、1951年から1955年までの5回が有賀喜左衛門によって担われており、1956年から中野卓と森岡の2人によって実施されたという。「長野県小県郡神川村国分調査」(I)と「長野県小県郡滋野村中屋敷調査」(L)は、有賀が担当した第1回・第2回社会調査実習の資料群である。森岡によると、小県郡の小学校の教師であった箱山貴太郎という人物が民俗学研究の関係で有賀と親しかったこともあり、調査地の紹介を受けたそうである。また、第2回の滋野では小県郡郡史編集のために学校教員も数名参加したという⁽⁸⁾。

1952年から3回にわたり実施された家族緊張の調査は、上記の有賀による社会調査実習とは別系統で、「社会的緊張」という大規模な共同研究の一環として実施された。山梨大学教育学部の服部治則さんの教え子の父親が山梨県津金村の中学校長を勤めていた縁で、津金村を選んだ。3回目の調査時、中学校で「うちで叱られたときのこと」という主題で生徒に書かせた作文が『『中学生の作文』』(M)という資料群に含まれている。この資料群には津金村での作文の他に、能登調査時の町野中学校・越路中学校での「お寺について」(1953)、安中調査での新島学園中学校2,3年生による「お寺」「お宮」「教会」に関する作文(1956)が含まれる。森岡はこれらの作文を直接まとめたわけではなく、「大人の意識がちゃんと写っているんだということを確認する意味」で使用したという⁽⁹⁾。

「石川県深見調査・千葉県富里村調査」(S)は、それぞれ1956年と1963年に東京教育大学でおこなわれた社会調査実習の資料群で、学生のレポートはあるものの、森岡による成果化は特にされていない。また、実習報告書は年度によって印刷できないケースもあり、1956年は印刷されていない。1956年の実習が石川県鹿島郡田鶴浜町深見(現：七尾市深見)でおこなわれた理由として、1952～1953年の九学会連合能登調査において近隣の和倉温泉に過雁荘という定宿があり、依頼できる宿泊先があったことが決め手になったと森岡は語っている⁽¹⁰⁾。

森岡は1953年以降、前身である農村厚生研究所時代から、国際基督教大学(以下、ICU)の社会科学研究所にて研究協力をしていた。ここで森岡が関わった調査は数多くあるが、「三鷹市民の余暇生活調査」(W)も本研究所での調査の一環である。ICUにほど近い三鷹市野崎をフィールドとしておこなわれた。「人口移動と神社」に関する調査と老人家族調査はそれぞれ成果化されている一方、この余暇調査が成果化された様子はない。

「妙智会本部での調査」(AC)は1972年から翌年にかけておこなわれた、山形県鶴岡市湯野浜での妙智会調査資料群の一端である。1970年に発足した、「宗教と社会変動」に関する日米共同研究の一環としてなされたこの調査は、東京教育大学社会調査実習を兼ねており、船橋恵子や桜井厚らも学生として参加していた。この調査の別の部分は『宗教と社会変動』に収録された論文(森岡・西山1979)で、西山の執筆部分では使用されているが、森岡自身は特に自身の研究に使用していない。当時は筑波移転や閉学に関わる教授会や第1回アジア社会学会議の開催準備などに忙殺され、調査全体の報告書を作成する時間がなかったという。

「児童養育費調査 川崎ドロップ分17票」(X)は、川崎・北会津・掛川で実施された児童養育費調査のうち、情報不足によりドロップした川崎調査の個票である。1960年から厚生省の附属機関であった特殊法人社会保障研究所(現：国立社会保障・人口問題研究所)によって児童福祉手当の基礎調査としておこなわれたこの調査に、森岡は非常勤研究員として関わった。

c. 共同研究による調査資料群

社会調査実習や研究プロジェクトほどに大規模ではないものの、他分野の研究者とともにおこなった共同調査で生まれた資料群も存在している。例えば「石川県浅川村二俣」(K)は、かつて河北郡に存在した浅川村二俣(現：金沢市二俣町)において、1951年8月中旬におこなわれた真宗大谷派の寺院、本泉寺および所在地である二俣を調査した時の資料群である。具体的には、『調査村の概況』と題した、土地や人口、産業、教育その他に関する河北郡浅川村に関する統計表と、住民票を写した住民世帯別調査票から構成されている。当時、森岡と同じく東京教育大学の助手

であった民俗学者の桜井徳太郎と共にこの調査をおこなったことがきっかけとなり、翌年からおこなわれた九学会連合による能登調査へ参加できたと森岡自身は語っている⁽¹¹⁾。この能登調査に端を発し、輪島市町野町川西で調査を重ねる中で「正願寺について真宗教団組織の原型を発見し、下寺（寺中・道場）をもつ大坊に注目するという、以後の現地調査の指針を定立できた」（森岡 [2003] 2016）ことに鑑みるならば、本調査はまさに森岡の社会調査の指針定立をもたらす端緒として重要なものであったと言えるだろう。また、本資料に関して森岡は論文化していないと述べていたが、主著『真宗教団と「家」制度』において、蓮如忌に関する事例として浅川村二俣の本泉寺へ言及がなされている（森岡 1962:82）。加えて、地域門徒団の事例説明の中でも僅かながら言及がある（ibid: 126）。ただし、蓮如忌についての言及は共同調査者である桜井徳太郎の著書『日本民間信仰論』（桜井 1958）を引用する形でなされている。こうしたことから判断すると、あくまで本調査資料単体では論文化していないだけではないかと推測される。

また、新保満とともに石川県町野町および岐阜県白川村へ行った際の調査を契機に2つの資料群が生まれている。ひとつは「岐阜県白川村平瀬」（Q）であり、もうひとつはキリスト教会調査による「能登半島農村教会調査 輪島教会関係」（R）である。白川村調査（Q）は、本来の目的であった飛騨の毛坊主については論文（森岡 1957）としてまとめられており、『真宗教団と「家」制度』にも形を変えて収録されている（森岡 1962:200-224）。一方で、本書でも言及されている（例えば ibid: 208）白川郷特有の大家族制についてはまとまった形では成果にしていない。教会調査（R）は、フィールドノートをはじめ、個々の会員の入会や洗礼などに関する資料群となっているが、これも森岡自身は成果化していない。なぜなら、輪島調査は白川村に同行した新保が単独で行ったものであるからである。

同じく共同調査による資料群としては、宗教史家の笠原一男が組織した真宗史研究会の科学研究費による共同研究の際に入手したと思われる⁽¹²⁾「郡上八幡安養寺文書」（U）がある。この資料そのものが成果物に寄与しているわけではないものの、真宗史研究会が寺から出してもらった生の史料の読み方を覚える場であったと森岡自身が語っている（親鸞仏教センター 2019）ことから、森岡の社会調査法の彫琢に寄与していると考えられる⁽¹³⁾。

d. 譲渡された調査資料群

他の研究者や関係者から譲渡された資料も、森岡のもとには数多く保管されている。例えば「今村家文書」（B）は、三重県師範学校の恩師である英語教員 今村晃から譲渡された明治期などの史料群やその写しが含まれている。また「岡田謙教授資料」（C）は、森岡の師にあたる岡田謙が学位論文『未開社会に於ける家族』（岡田 1942）を執筆するにあたって用いた、台湾の高砂族および本島人調査関連の資料をはじめ、講義ノートや写真のネガ、岡田の東京教育大学文学部葬に関するものなどが含まれている。岡田の死後、売却されたり捨てられたりせずに残っていた資料群を岡田の妻から預かったものだという。

「伊賀古文書附藤堂」（E）は伊賀郷土史研究会の会長であった古本屋の沖森直三郎から譲渡された藤堂藩関連の資料群である。「福井県石徹白資料」（T）は郷土史家の加藤なる人物から譲渡された資料群である。森岡は福井県大野郡石徹白村（現：岐阜県郡上市・大野市）の浄土真宗に関心をもって訪問したものの、成果にたる調査はおこなわなかった。ただし、『真宗教団と「家」制度』では真宗教団寺院の成立と白山信仰との関係で石徹白への言及がある（森岡 1962:46-

48)。このことから、石徹白資料のみでの成果化はなされずとも、その関心が、資料を直接利用する形であったかは定かではないものの、森岡の真宗教団研究の一端に組み込まれて著作に反映されたと考えられる。

「岡山県新池 年賀状調査」(N)のうち新池関係のものは、『Village Japan』(Beardsley et al. 1959)のリスタディを、岡田謙を代表とする調査団が1956年からおこなった際の資料群である。ミシガン大学日本研究センターの初代所長で、当時アジア財団の駐日代表者を務めていたロバート・B・ホールの委嘱により、森岡は新池農業機械化調査委員会委員となって上記調査団の事務局を3年間担当し、現地調査は東京大学大学院生川本彰と東京教育大学大学院生柿崎京一が担当した。資料群には『Village Japan』で用いられた1954年ミシガン大学の面々が聞き取ったライフヒストリー(英文)や、英語での報告書、書籍、日本語での調査票などが含まれている。新池調査そのものの成果は新池調査委員会編(1960)として出版されているが、森岡自身は執筆された論考の点検をして意見を入れる役割を担っただけだったことから、『年譜・著作目録』には本書を著作としては掲載していない。また、年賀状調査は人類学者の別府春海がおこなった調査集計の資料であり、新池調査とは別の譲渡資料である。この資料は、当時東京教育大学の学生だった石原邦雄により1966年の勝沼調査(Y)の一端として実施された「勝沼年賀状調査」(Z)と関わっている。森岡の解説によると、石原による調査結果は別府に送付されている。また、石原の調査に触発されたと思われる米村昭二が岡山県御津郡御津町北野で集めた年賀状調査のデータを別府に送付しており、それを別府が集計して森岡へ送ったのが本資料である。資料に引用されていた農業センサスの年代から1965年以降に送付されたものであるが、正確にはいつ作られた資料群かは不明である。異なる文脈を持つ2種類の資料群が同じ場所に整理されていたのは、作成された時期が近かったからではあるまいか。

「井上愛子都心教会調査」(AA)は、森岡が卒論指導をした学生の一人だった井上愛子が、1968年の卒論執筆に際して収集した資料を引き取ったものである。1956年から1979年度までの長きにわたるICUでの非常勤講師の間に森岡は卒論指導をしていたという。井上は上智大学大学院へ進学したこともあり、桐ヶ丘都営住宅調査(AB)や妙智会湯野浜調査(AC)でも調査に協力していた。

3 「業績にならなかった」調査資料群をどのように活かすか

3.1 調査資料群の類型

以上、森岡自身の研究業績としては成果化されなかった30種類の調査資料群の概要とその詳細について検討してきた。ここまで検討してきた内容に沿って、各資料群は下表のように分類することができるだろう。

表2 調査資料群の分類

資料の種類	該当する調査資料群（表1の記号に準拠）
学生時代・キャリア最初期の調査資料	A、D、F、G、H、J
共同調査の資料	K、Q、R、U
研究プロジェクト・社会調査実習	I、K、L、M、N（新池調査）O、P、S、W、X、Y、AB、AC
森岡自身のものではない調査資料・譲渡された資料	B、C、E、N（年賀状調査）、T、V、Z、AA

上記の類型を見比べると、「研究プロジェクト・社会調査実習」が13種類と最も多く、「森岡自身のものではない調査資料・譲渡された資料」が8種類で続く。キャリアの長さや研究史を鑑みても、さまざまな研究プロジェクト・共同調査との関わりや受け持ってきた社会調査実習の多さからくる資料群の量であると考えられる。注目すべきは、森岡の単独調査によるとみられる資料は「学生時代・キャリア最初期の調査資料」のみということである。つまり、キャリア最初期を除けば、森岡自身が単独でおこなった調査結果のほぼ全てが何らかの業績として刊行されているということである。

では、これらさまざまな文脈から生成された調査資料群はどのように活用しうるのだろうか。以下では資料の性質に沿ってその活用可能性について検討することとしたい。

3.2 調査資料群の活用可能性について

a. キャリア最初期の調査資料

まずはキャリア最初期の調査資料群についてである。これらは1940年代後半から50年代前半に生成された資料群であり、特に伊賀や阿波村下阿波に関するもの（A、D、F）や三重県の真宗史・仏教史にまつわるもの（G）については、当時の農村や真宗の状況を伝える歴史的な史料として貴重である。一方で、2019年現在からみると、社会調査としてこれらの対象を再調査するには時間が経ちすぎているとも思われる。森岡自身も昭和10年代におこなわれた柳田國男の農山村調査のリスタディをおこなった経験から、記録や統計資料がない場合、「30年くらいがもうマキシマム」であると語っている⁽¹⁴⁾。その理由は、当時を知る人間がいなくなってしまう、現地とのつながりや記憶がないと掘り下げが困難になるからだという⁽¹⁵⁾。

たしかに、調査した森岡自身は当の調査地の出身であり、まさに現地とのつながりや記憶を有しているがために掘り下げをおこなうことができるだろう。しかし、後世の他の研究者たちがこの資料群に触れるとき、はたして森岡と同様のリスタディが可能だろうか。必ずしも資料生成からの経過年数によって決められるものではないものの、森岡のキャリア最初期の社会調査資料群は歴史史料化する過渡期にあるといえるだろう。こうした社会調査と歴史の関係を問う端緒を示す資料としても、森岡のキャリア最初期の資料群は重要な時期にさしかかっている。

b. 共同調査・研究プロジェクトの資料

次に、共同調査や大型の研究プロジェクトによる調査資料群である。これらは共同調査者による成果化がなされているケースや、プロジェクト内の別の資料について森岡自身が成果化してい

る場合もあるため、プロジェクト全体の文脈に鑑みて当該資料群を位置づける必要がある。また、調査資料を成果化できなかった理由として森岡の研究プロジェクトに対する関わり方が影響していると思われるケースもある。例えば農村SSMや新池調査において森岡は事務局として参加しており、その分だけ資料収集への関わりが少なかった。また、学位論文への専念や東京教育大学の移転・閉学問題への対応など、森岡の研究者としての個人史上のイベントゆえにあまり積極的にかかわることができなかったこともあるだろう（N、O、P、AC）。

一方で、これらの資料を読み解くことは調査そのものの再検証や二次分析、リスタディなど、新たな研究の端緒となることはもちろん、森岡を取り巻く研究者ネットワークを検証する上でも重要である。成果の有無にかかわらず、例えば調査概要や調査関係者を追うことによって、どのような研究者と関わる中で森岡の宗教社会学・家族社会学・歴史社会学的な研究関心や調査対象との関わりが生まれ、洗練されていったのかを検討する一助となるだろう。また、これはキャリア初期の資料群にもいえることだが、調査手法の彫琢との関わりは本資料群に関する森岡自身の資料解説の中でも『年譜・著作目録』の中でも、調査法をどのように学んだかについての言及として散見される。例えば、真宗史研究会との関わりの中で歴史史料の読み込み方を学んでいったように、調査成果を業績として刊行することだけでなく調査過程そのものが社会調査法の彫琢やその後の研究成果にとって重要な意味を持つと考えられるケースも存在するのである。

c. 社会調査実習

続いて、社会調査実習による調査資料群である。森岡が成果化しなかった理由としては社会調査教育の意味合いが強く、調査のアレンジメントや報告書の作成はおこなっても自身の研究成果に直結する形では実施されていないケースもあるからだと思われる。また、調査報告書の発行が年度によってバラつきがあるという事情もあったことから、調査成果をまとめるだけの余力がなかった場合もある。しかし、先にもふれたように、森岡が関わっていた各種の研究プロジェクトと合わせて実施された社会調査実習も少なくないため、調査人員の確保という側面があったとしても、必ずしも森岡の研究関心と無関係におこなわれたわけではない点は留意が必要だろう。

社会調査教育という点に鑑みても、当時最新の研究動向に関わる事ができる機会となっていたことは学生にとっても大いに刺激を受けることになったのではないだろうか。実際、森岡のもとで学んだ学生のうち、研究者となった者も少なくない。本資料群を検討することは、問題関心や社会調査の手法、研究対象の彫琢において、戦後社会学における東京教育大学出身の社会学者の最初期キャリアの一端を明らかにする可能性があるといえるだろう。そして、本資料群は東京教育大学の調査教育について検討する手がかりとしても有力である。有賀喜左衛門から中野卓と森岡による指導体制への移行や彼らそれぞれの社会学研究室での位置取り、当時森岡が教鞭を執っていた東京教育大学とICUが合同で実施した社会調査実習の在り方に関する資料としても興味深い。森岡が保管していた資料群の中には、東京教育大やICUなどでの調査報告書や『Group Mind』と呼ばれる社会学研究室会報およびその学内版、東京教育大学の学園祭である桐葉祭参加時の社会学科所属学生による調査報告書なども含まれているため、社会調査教育について検討するにあたってはこれらもあわせて分析する必要があるだろう。

d. 森岡自身のものではない調査資料・譲渡された資料

最後に検討するのは、森岡自身の調査によるものではない資料群である。資料自体は譲渡されるなどして森岡が所有・保管していただけであり、業績になっていないこと自体はさほど重要なことではない。これらの資料群において重要なのは、東京教育大学等での人間関係の一端がこれらの資料を入手した文脈に現れることだろう。また、東京都心の教会や立正佼成会、明治期の旧藤堂藩領の農村などに関する資料群としても活用可能性があることはいうまでもない。そして、個人が収集した社会調査資料群がまとまった形で保管されていること自体も価値があるだろう。著名な研究者の場合であれば所属していた大学や研究機関等に個人文庫のような形でアーカイブされるケースもあるが、当該の人物が亡くなった時や研究から離れた際に散逸する可能性が高いため、あくまでも部分的で研究者の包括的な資料群ではないとはいえ、その点でも貴重といえる。

3.3 成果化の有無という二分法に抗する「業績にならなかった」資料群

前節まででは、後進による活用可能性に主眼を置いて森岡の社会調査資料の性質を検討してきた。こうした活用可能性は「業績にならなかった」という性質を「業績化する」形で補完していく方向性を示すものである。だが、これらの資料が持つ可能性をより引きだそうとするならば、「業績にならなかった」資料を利用して穴を埋めるように「業績化する」といった発想からさらに考察を進める必要があるだろう。

そもそも、森岡清美の「業績にならなかった」資料は本当に成果化されていないのだろうか。たしかに、譲渡された資料のように森岡自身の関心に沿って収集されたわけではないものについては、森岡清美が入手・保管していたという事実が重要なのであって、彼の研究と直接的に結びつけることは難しいだろう。しかし、キャリア初期の資料や共同調査・研究プロジェクトやそれに伴う社会調査実習により収集された資料は、直接的には記述・分析されていないからといって「業績にならなかった」と言えるのだろうか。すでに例示したように、森岡の社会調査法の彫琢に関わった資料（U）は言うまでもなく、宗教社会学や家族社会学の文脈で研究指針の定立や、言及や成果化された部分とは異なる新たな関心・方向性の萌芽が見出される資料群も存在する（K、Q、Y）。また、調査段階で関わった資料群が他の研究者によって活用されている（AB、AC）。これらの調査資料、特に共同研究による調査資料については、森岡自身や他の研究者に与えた影響に鑑みるならば、広義では森岡社会学の成果物の一環として位置づけることが可能ではないだろうか。そして、成果として公開されなかったとしても、こうした調査やその過程で生成された資料群が新たな研究関心を生み出した点もまた、社会調査資料に内在的な可能性ではないだろうか。

成果物になったかならなかったのかの境界は、「業績にならなかった」か「業績化される」かという、単純な二分法や穴埋め的な研究上の版図拡大にとどまるものではない。研究業績の中で記述・分析されるかを超えて、資料そのものが研究という営みそのものを進める上での環境とでも呼ぶべきものを構成しているのである。そして、ここまでの検討を言い換えるならば、森岡清美や彼を取り巻く研究者はそれを読み解く中で種々の成果を享受したといえるかもしれない。成果化されなかった調査資料群はその存在そのものが蓄積・保管されることによって、本論の副題でもある「業績にならなかった」という形容詞を問い直す契機ともなりうるのである。

4 調査資料公開をめぐる課題

ここまで、森岡清美によっておこなわれた社会調査資料群のうち、「業績化されていない」資料群の活用可能性を検討してきた。その結果、森岡清美の社会調査法の彫琢過程や研究者ネットワーク、教育歴を示す資料群としての価値、そして研究資料の成果化の有無という単純な二分法を超えた研究上の営みとしての位置づけが見出された。こうした活用可能性を残していくためにも、これらの資料群はアーカイブ化され、後進の研究者に向けて保管・公開される必要がある。では、実際にこれらの資料が後世の研究者たちに活用されるにあたってどのような課題があると考えられるだろうか。

ここでは特に、質的社会調査資料のアーカイブスの議論を敷衍する形で検討をおこなう。なぜなら日本において、統計調査の個票などの量的社会調査については、すでにデータの保管方法や公開・活用について議論の段階が進んでいる（轟 2012）一方、森岡資料群にも数多く含まれる質的社会調査についてはアーカイブ化の段階からしたいへん遅れているのが現状だからである（桜井 2014:111）。小林多寿子によると、質的調査データの中でも特に聞き取り調査によるデータは「[知が生成された]調査のコンテキストを記録することで豊かな了解可能性につながるなら、オーラリティを活かした管理・保存のしかたを積極的に考えていくこと」が求められる。また、質的調査データをアーカイブ化するにあたっては、当該データを分析・考察・論述する際の「個別性から脱して一般化していく帰納的な推論の道」や「質的調査データ特有の「脱埋め込み化」といえる過程」を再考も必要であると指摘されている（小林 2014:120）。特に成果化されていない調査データの場合、調査のコンテキストが明示される形で管理・保存されなければ、どういった再活用が可能かを判断する手がかりを欠いてしまうことにつながるだろう。

しかし、質的社会調査資料の管理・保存の方法については、現状共有されたコンセンサスがあるわけではない⁽¹⁶⁾。公開データの目録作成の方法はもちろん、公開に関する運用上の規程や同じ資料群内での調査ごとでの公開許諾はアーカイブごとに異なっていた。こうした社会調査資料の管理・保存をめぐる形式上の課題については、中澤ら（2009）が指摘したように、これまで歴史学において蓄積されてきたような博物館学との連携を図りつつ、「調査のアーカイブズ学の確立」（中澤他 2009:121）することが改めて求められていると言える。また、公開データの利用や管理・保存のための運用資金・人員をめぐる状況も大きく異なるため、いかにリソースを確保し、リソースの範囲内でいかに管理・保存をおこなっていくかは量質の違いを問わず、後進のための調査資料のアーカイブ化において重要な課題である。

5 むすびにかえて

以上で見てきたように、これまでに業績として発表された調査資料群以外の資料についてもさまざまな活用可能性があることを検討してきた。森岡による調査資料群のうち、本論で取り上げたような「業績となっていない」調査資料はどの程度再検証や二次分析、リスタディに使えるのだろうか。3章での検討をふまえるならば、資料の扱い方は次の4種類に大別されるだろう。すなわち、①森岡清美という社会学者を軸に戦後社会学の社会調査法を研究する上での資料、②宗教研究や家族・イエ制度研究、歴史社会学的研究の（再）検証に有用な資料、③東京教育大学に

における社会調査教育に関する資料、そして④成果化をめぐる二分法に抗する思考契機である。本論で取り上げた業績にならなかった資料群に限定していえば、調査手法の彫琢や社会調査教育を検討する際、特に有効に活用しうるだろう。なぜなら、社会調査の手法を学び実践していく過程での蓄積として資料群を捉えかえすことで、単に成果として刊行されていない資料としてだけでなく、社会調査者としての森岡清美の形成過程を検討しうるからである。また、森岡が社会調査を指導する際の実践成果としての資料や報告書を取り上げることで、どのような研究者によってどのように社会調査法が継承されたのか、東京教育大学における社会調査教育の実態について問う契機となりうる。さらに、たとえ業績として直接的に記述・分析されずとも、こうした資料群の存在が森岡や彼が関わった研究者を触発する環境を構成する形で成果をあげていることを例示していると捉えうる。

こうした森岡清美の社会調査手法の彫琢および東京教育大学における社会調査教育の実態を検討することは、戦後社会学における社会調査の展開の一端を明らかにすることにつながるだろう。本論で取り上げた資料群に限っていえば、森岡の研究業績やキャリアから漏れ出たものを扱うため、資料単体では文脈からみて断片的にならざるをえない。そのため、テーマやフィールド、調査法といった時系列的な流れを持つ側面をどのように扱うのかについて、宗教研究や家族・イエ制度研究、歴史社会学的研究の業績、あるいは森岡自身のキャリアと対比する形で位置づけていく必要があるだろう。そして、こうした位置づけをもってはじめて、「業績にならなかった」資料群は通奏低音のように社会学研究を構成するものとして再解釈できるのではないだろうか。

調査者の「仮説形成過程を追体験」することができる途中経過資料であり、学説史的意義の大きい「知識の伝達・創出が行われる研究者集団の組織や管理方法、対象社会の構造的要因や歴史的背景などについての資料」を後続研究者に残す（中澤他 2009:124）ためにも、さらなる調査資料アーカイブの重要性の主張とリソース確保に向けたノウハウの蓄積が必要となっている。

注

- (1) 本論で取り上げた森岡清美の調査資料群を預かり、アーカイブ化することになった経緯や調査資料群のリストについては、質的データ・アーカイブ化研究会の科研費研究成果報告書を参照（質的データ・アーカイブ化研究会 2014:89-98）。1980年代後半以降の調査資料や現在の研究に用いている資料は森岡自身が保管しているため、本論で取り上げる調査資料があくまでも森岡の研究の一部に関わるものであることに留意したい。ただし、第2回日中家族比較学術検討会があった1992年以降、森岡は「学界の研究振興に微力をつくしてきた姿勢を改め、一途に自分の研究推進に努める研究個人主義に切り換えた」と同時に「面接調査本位から文献中心の研究」へ研究スタイルが変化したとしている（森岡 [2003] 2016:34）。このことから、いわゆるフィールドワークによる社会調査で生成された資料としては、森岡の研究キャリアの比較的長い期間をカバーしていると考えられる。
- (2) 3回にわたる調査資料解説はそれぞれ2014年2月24日、2014年10月15日、2015年3月2日に一橋大学にておこなわれた。筆者は2回目と3回目にリサーチ・アシスタントとして参加しており、当時のメモ等を参照しつつ、参加していない1回目や引用した森岡の発言の詳細については小林多寿子教授によって作成された資料解説3回分のトランスクリプトを参考にした。
- (3) 無足人とは、伊賀における村落在住の郷土および藩への献金によって名字帯刀を許された豪農を指す称号である。身分は士分ではなく農民である。伊賀の無足人については森岡（1954）において成果化されている。

- (4) 2015年3月2日午前、資料解説にて。
- (5) 森岡自身の『年譜・著作目録〔再訂版〕』において、1950年の東京文理科大学特別研究生第一期修了論文「仏教教団の構造－浄土真宗高田派の教団組織について－」が「私の唯一の未刊原稿である」が、これについてもアイデアを発展させ、『真宗教団と「家」制度』（1962）として刊行したと記されている（森岡〔2003〕2016:10）。
- (6) 2014年2月24日午後、資料解説にて。
- (7) 2014年2月24日午前、資料解説にて。
- (8) 2014年2月24日午後、資料解説にて。
- (9) 2014年2月24日午前、資料解説にて。
- (10) 2014年2月24日午前、資料解説にて。
- (11) 2014年2月24日午前、資料解説にて。
- (12) 森岡自身は第1回の資料解説の際、「大体昭和30年前半、私が本を書く前」と語っているが、『年譜・著作目録』には昭和30年前半にその記録はなく、1962（昭和37）年8月1～8日に岐阜県郡上八幡で「真宗寺院史料調査」をおこなったとされている（森岡〔2003〕2016:16）。
- (13) 郡上八幡安養寺文書の調査時期より前になるが、2つの論文（森岡1952、1953）が真宗史研究会での史料調査を通じて学んだ史料の読み方を活かした成果物として挙げられている（親鸞仏教センター2019）。
- (14) 2014年10月15日午後、資料解説にて。
- (15) 実際、2015年9月28-29日、森岡清美・桜井厚・小林多寿子とともにキャリア初期の調査地である伊賀市を訪問した際のことを振り返ると、森岡の現地とのつながりや知識・記憶を抜きにしては、調査当時との変化やその比較が困難であっただろうと筆者には感じられた。
- (16) 本科研費研究では、飯島伸子文庫（2014年）、鶴見和子文庫（2018年）、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター（2018年）、鶴見良行文庫（2018年）を訪問し、各アーカイブの成立経緯やアーカイブ化の特徴などについてヒアリングをおこなった。特に飯島伸子文庫および鶴見和子文庫については、アーカイブ成立の経緯が紀要の特集号（京都文教大学人間学研究所『人間学研究』2006（7））や科研費報告書など（平林2006・帆足2007）にまとめられている。

参考文献

- Beardsley, Richard K., John W. Hall and Robert E. Ward 1959 Village Japan, Chicago: University of Chicago Press.
- 平林祐子 2006 「「飯島伸子文庫」開設——環境社会学の歴史と発展を辿るアーカイブ——」『環境社会学研究』12（0）: 178-185.
- 帆足養右 2007 『日本及びアジア・太平洋地域における環境問題と環境問題の理論と調査史の総合的研究』2003-2006年度科学研究費補助金研究成果報告書（15330111）、富士常葉大学.
- 小林多寿子 2014 「質的調査データの公共性とアーカイブ化の問題」『フォーラム現代社会学』13:114-124.
- 京都文教大学人間学研究所 2006 「特集 追悼・鶴見和子 連続公開ミニ・シンポジウム（全4回）鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫（京都文教大学図書館所蔵）から思想と方法論の水脈をさぐる」『人間学研究』7:1-48.
- 森岡清美 1948 「同族結合に関する一試考」『社会学研究』2（1）:73-88
- 森岡清美 1952 「中世末期本願寺教団における一家衆（上）」日本社会学会『社会学評論』9:41-51.
- 森岡清美 1953 「中世末期本願寺教団における一家衆（下）」日本社会学会『社会学評論』10:50-59.

- 森岡清美 1954 「伊賀の無足人制度の諸問題」『伊賀郷土史研究』 3:63-77.
- 森岡清美 1957 「飛騨の毛坊主」, 真宗史研究会編『封建社会における真宗教団の展開』山喜房仏書林, 205-238.
- 森岡清美 1962 『真宗教団と「家」制度』創文社.
- 森岡清美 2006 「日本社会の歴史社会学」『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』 40:117-129.
- 森岡清美 2012 『ある社会学者の自己形成——幾たびか嵐を越えて——』ミネルヴァ書房.
- 森岡清美 [2003] 2016 『森岡清美 年譜・著作目録 再訂版 [私家版]』印刷製本・甲文堂.
- 森岡清美 2016 『真宗大谷派の革新運動：白川党・井上豊忠のライフヒストリー』吉川弘文館.
- 森岡清美編 1967 『二世比較法による社会変動の研究』東京教育大学社会学研究室.
- 森岡清美・西山茂 1979 「新宗教の地方伝播と定着の過程——山形県湯野浜の妙智会会員調査から——」柳川啓一・安斎伸編『宗教と社会変動』東京大学出版, 137-194.
- 中澤秀雄・西城戸誠・大國充彦・新國三千代・祐成保志・新藤慶・小内純子・高橋徹 2009 「社会調査とデータ管理の諸方法（2）「社会調査のアーカイブズ学」の必要性——札幌学院大学 SORD が取り組んだ「夕張調査資料集成」作成経験からの提言——」『理論と方法』 24（1）:121-128.
- 新池調査委員会編 1960 『日本農業機械化の分析：岡山県高松町新池部落における一実験』創文社.
- 桜井厚 2014 「特集Ⅱ 質的調査のアーカイブ化の問題と可能性 はじめに」『フォーラム現代社会学』 13:111-113.
- 桜井徳太郎 1958 『日本民間信仰論』雄山閣.
- 質的データ・アーカイブ化研究会編 2014 『質的データ・アーカイブ化とリサーチ・ヘリテージ』2011-2013年度科学研究費補助金研究成果報告書, 一橋大学.
- 親鸞仏教センター 2019 「インタビュー 軍師・井上豊忠——白川党の研究をめぐって——」, (2019年1月2日取得, http://www.shinran-bc.higashihonganji.or.jp/report/report12_bn10.html)
- 轟亮 2012 「特集Ⅱ 社会調査とデータ・アーカイブ はじめに」『フォーラム現代社会学』 11:101-102.
- 堤マサエ 2009 『日本農村家族の持続と変動』学文社.
- Yoriko, Nojiri, 1974, "Family and Social Network in Modern Japan: A Study of an Urban Sample", Doctoral dissertation in Case Western University.

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)